

## 第2章 国指定文化財



重要文化財（美術工芸品） やまのくちいせき 山ノ口遺跡出土品

1 所在地

鹿児島県立埋蔵文化財センター，鹿児島県歴史・美術センター黎明館

2 指定年月日

令和7年9月26日指定

3 特徴

山ノ口遺跡は，錦江町の鹿児島湾に面した砂丘上に存在する。昭和30年代，鹿児島県考古学会の黎明期を主導した河口貞徳らによって発掘調査が行われ，軽石を円形に並べた弥生時代中期後半の配石遺構群とともに，土器や軽石製品などの祭祀遺物が多数出土した。

岩偶に代表される軽石製品は，弥生時代におけるこの地域の独特な精神世界をよく示す。岩偶は男女の一点ずつがあり，特に女性岩偶は，乳房，性器，髪の毛の結末がそれぞれ陽刻，穿孔，線刻によって表現され，より具象的である。

土器には甕形，壺形，鉢形などがあり，その多くは体部に穿孔が認められる。土器を置く際に，その機能を失わせる儀礼行為を行ったことを示している。またこれらの土器は，器種の揃う残りのよい一括資料としても重要で，弥生時代中期後半の南九州地域に分布する土器群を代表して，山ノ口式土器と呼ばれる。土器の多くには，開聞岳起源の火山噴出物・暗紫ゴラが固着しており，放射性炭素年代測定によって年代の定点が与えられることも，その価値を高めている。



写真提供：鹿児島県

重要無形民俗文化財 いわがわ や ごろうにんぎょう 岩川の弥五郎人形行事

- 1 所在地  
曾於市
- 2 保護団体  
弥五郎どん保存会
- 3 指定年月日  
令和7年3月28日
- 4 公開日  
毎年11月3日
- 5 特徴

本件は、鹿児島県曾於市大隅町の岩川八幡神社いわがわはちまんじんじやの秋季例祭に行われる行事で、弥五郎と呼ばれる巨大な人形しんこうぎょうねつが神幸行列の先頭について町内を練り歩き、五穀豊穰を祈願する。弥五郎は、古代の隼人伝説に登場する武人姿の巨大な人形で、浜下りと称する神幸行列の先払い役として祭りに登場する。弥五郎人形は、台車に載せて地区の男児たちが引き、岩川の市街地を巡行する。

南九州地方には、弥五郎の名称をもつ巨大な人形を作り、神幸行事しんこうぎょうじの先払いさきばらとして曳き回す行事が特徴的に分布している。本件は、そのような南九州地方における大人形の出る行事の典型的な伝承例であり、また、弥五郎と呼ばれる大人形の形態やその伝承には、同地方に顕著な大人伝説おおひととの関わりも窺われ、地域的な特色も豊かである。

南九州地方における大人形を用いた神幸行事の地域的展開や、我が国における祭礼行事の変遷を理解する上で重要である。



弥五郎人形



浜下りの行列

写真提供：曾於市

## 史跡 与論城跡

### 1 所在地

鹿児島県大島郡与論町

### 2 指定年月日

令和7年3月10日指定

### 3 特徴

与論城跡は、標高93mの琉球石灰岩の台地下に造られた琉球式のグスク跡（城跡）である。14世紀後半～中頃に台地部分の造成と石垣の構築が始まり、その後、崖下部分が造成され、現在の城域が整備されたと考えられている。最北端のグスクであるが、沖縄本島のグスクとは異なり比高約70mの急斜面を城域に取り込むことが最大の特徴とされている。また、台地部分の石垣は、野面積みで、張り出しをもちゆるやかに屈曲する平面形で、構築方法も野面石の背後に裏込めを入れるなど、沖縄のグスクの構造や技術が認められる。与論城跡は、17世紀以前に廃絶した。

伝承によると、与論城は、琉球国山北王の三男王舅が14世紀後半から15世紀前半に築城したといわれている。

与論城跡は、明、琉球、奄美、薩摩などによる東シナ海域の歴史的な状況の変化に連動して築城されるなど、当時の南方社会の実態を知る上でも重要である。



航空写真 伝 龍頭～琴平神社の石垣（北より）



建物跡（柱跡）検出状況

写真提供：与論町

史跡 奄美大島要塞跡及び大島防備隊跡 附 大島需品支庫跡

1 所在地

鹿児島県大島郡瀬戸内町

2 指定年月日

令和5年3月20日指定

令和7年9月18日追加指定及び名称変更

3 特徴

奄美大島要塞跡及び大島防備隊跡 附 大島需品支庫跡は、大正10（1921）年から建設が開始された陸軍と海軍の要塞跡である。昭和6（1931）年頃から、陸軍が弾薬庫や砲台を建設し、奄美本島西南端の西古見砲台跡、加計呂麻島東端の安脚場砲台跡、要塞司令部のあった奄美大島の古仁屋近くには手安弾薬本庫跡が残っている。

本史跡は、遺構がまとまって残っていて要塞全体の理解ができるとともに、近代日本の国防施策を考える上でも重要な遺跡である。

今回、大正12（1923）年開庁の陸軍要塞跡に、昭和16（1941）年配備の海軍大島根拠地隊から発展した大島防備隊の本部跡、昭和19年に防備隊に編入した第18震洋隊基地跡、明治28（1895）年に設置された海軍施設の大島需品支庫跡の水溜跡等を追加し、名称を変更する。



佐世保海軍軍需部大島需品支庫跡 水溜跡



大島防備隊第18震洋隊基地跡 第5格納壕

写真提供：瀬戸内町

史跡 旧集成館 附 寺山炭窯跡 関吉の疎水溝

1 所在地

鹿児島県鹿児島市

2 指定年月日

昭和34年2月25日指定

平成25年3月27日追加指定

平成25年10月17日追加指定

平成26年3月18日追加指定

令和7年9月18日追加指定

3 特徴

集成館は、嘉永5（1852）年、島津齊彬<sup>なりあきら</sup>が築いた工場群である。大砲をつくるための反射炉<sup>はんしゃろ</sup>や溶鉱炉<sup>ようこうろ</sup>、鑛開台<sup>きかいだい</sup>やガラス工場、蒸気機関の製造所などが建設された。1,200人が働いていたという当時日本最大・最高水準の工業施設で、齊彬はこの集成館を中核にして、製鉄・造船・紡績<sup>ぼうじん</sup>・電信など様々な近代化事業を推進した。

文久3（1863）年の薩英戦争で焼失したが、養子である島津忠義<sup>ただよし</sup>によって復興され、幕末維新期に薩摩藩の軍事力を支えた。集成館に必要な白炭<sup>しろすす</sup>を製造した寺山炭窯跡と、集成館への用水施設である関吉の疎水溝も指定されている。

今回は、発掘調査で判明した、集成館工場群の南端にあった石庫<sup>いしぐら</sup>の跡を追加指定した。



発掘調査の風景



石庫跡

写真提供：鹿児島市

# 天然記念物 徳之島<sup>みょうがん</sup>明眼の森・義名山<sup>ぎなやま</sup>の森<sup>りゅうきゅうせつかいがんち</sup>琉球石灰岩地森林植物群落

## 1 所在地

鹿児島県大島郡伊仙町

## 2 指定年月日

平成25年3月27日指定

令和7年9月18日追加指定及び名称変更

## 3 特徴

奄美大島以南の琉球列島の低地部は、主に隆起サンゴ礁起源の琉球石灰岩から構成されており、ここでの自然植生は、亜熱帯的相観を示すアマミアラカシ群落などが成立するが、集落や農耕地として利用され、ほとんど残されていない。既指定地の「明眼の森」は、風葬地やノロにまつわる神聖な場所として残されたアマミアラカシ群落を中心とした自然林であり、今回追加指定する義名山の森も、水源地として水神が祀られるなど神聖な場所として守られた、主にアマミアラカシ群落からなる良好な状態の自然林である。

「義名山の森」は、「明眼の森」よりも古い時代に隆起したと考えられている琉球石灰岩地にある琉球石灰岩の風化が進行し薄い表土が見られる適潤な環境であり、全域がほぼアマミアラカシ群落からなり、約170種の植物種が確認され、多くの絶滅危惧種や希少種が生育している。

「義名山の森」及び「明眼の森」は、当該地が神聖な土地として保護されてきた歴史的経緯のもと、良好な自然植生が残されており、琉球石灰岩地における自然植生を理解するうえで極めて貴重なものである。指定名称を「徳之島明眼の森・義名山の森琉球石灰岩地森林植物群落」に変更し、保護を図るものである。



「義名山の森」を南から望む

写真提供：伊仙町

## 第3章 国登録文化財



国登録有形文化財（建造物）

ちんじゆかん け ちゃしつかくじゆけん  
沈壽官家茶室鶴壽軒

1 所在地

日置市東市来町美山字藤之尾 1715

2 登録年月日

令和7年8月6日

3 建築年代

昭和44年 / 令和4年改修

4 建築構造

木造平屋建，鉄板葺

5 建築規模

面積 40 m<sup>2</sup>

6 特徴

市街地西方にある薩摩焼窯元<sup>かまもと</sup>の茶室。敷地西南に建つ宝形造鉄板葺<sup>ほうぎょうづくりてっばんぶき</sup>で南・東に軒支柱<sup>のきしちゆう</sup>を深くつくる。内部は茶室と水屋<sup>かみざ</sup>からなり、茶室は八畳間に床を上座<sup>とこわき</sup>に構え、床脇<sup>さどぐち</sup>に茶道口<sup>さどうぐち</sup>を設ける。裏千家<sup>そうしつ</sup>15代宗室監修による洗練された茶室で当家との交流を示す。



茶室外観



茶室の内部

写真提供：日置市



## 鹿児島県文化財調査報告書第72集

発行日 令和8年3月

発行者 鹿児島県教育委員会

〒890-8577

鹿児島市鴨池新町10番1号

電話099-286-5355（文化財課）

